

GO KAYAMA

五ヶ山 A-1 号墳



1992

静岡県磐田郡浅羽町教育委員会

例 言

1. 本書は山砂利採取に伴い、1990年度に調査を実施した五ヶ山A－1号墳（A地点の1号墳という意味）の調査報告書である。
2. 調査は榑松組を委託者、浅羽町を受託者として、静岡県教育委員会文化課の指導のもと、浅羽町教育委員会が実施した。
3. 発掘調査は1991年1月16日から3月15日まで行い、整理・報告書作成は1991年度に行った。
4. 調査に関する資料および出土遺物は浅羽町教育委員会で保管している。
5. 本調査の調査体制は下記のとおりである。
調査主体者 静岡県磐田郡浅羽町教育委員会教育長 岡本 幸夫
調査担当者 浅羽町教育委員会社会教育課 山本 義孝
事務局 浅羽町教育委員会社会教育課
作業員 荒井克己 石川幸一郎 石川かの 伊藤 昌 川島喜美子 金原哲子
金原みよ 久保田久子 杉島六郎 武田光子 恒川鶴子 戸塚寛
間瀬裕美
6. 本書の執筆は山本義孝が行った。

目 次

I は じ め に	1
II 古墳の位置と周辺の遺跡	1
III 墳 丘	7
IV 主 体 部	11
V 出 土 遺 物	13
VI 総 括	15

I は じ め に

1989年に浅名字五ヶ山地内で19,954㎡の範囲に及ぶ山砂利採取の計画が申請された。その後、埋蔵文化財の有無を確認すべく1990年11月、工事主体者である樽松組の立ち会いのもと、現地踏査を行った。この結果、尾根の稜線上の二箇所古墳が存在する可能性が考えられたために協議を行い、トレンチによる確認調査を実施することになった。

確認調査は12月3～11日にかけて行った。調査では、墳丘状の高まりの中心を通るように幅1mのトレンチを十字形に設定し、手掘りで表土を除去し、地山まで掘り下げた。

その結果、一箇所が古墳であることが判明した。墳丘の中央部には墓壇らしき遺構があり、墳丘裾では地山を整形した部分（カット面）を確認した。このため、約400㎡にわたって全面調査を行う必要が生じ、本調査を1991年1月16日から実施した。

II 古墳の位置と周辺の遺跡

古墳の位置

五ヶ山A-1号墳は、浅羽町浅名五ヶ山2134-282外3筆に所在する径18mあまりの円墳である。五ヶ山の一带は丘陵地帯を中心とした地域であり、通称浅羽平野と呼ばれる海岸平野が全面に広がる浅羽町にあっては、貴重な地域といえる。

五ヶ山は海拔264mの小笠神社付近を最高点とする小笠山丘陵の南西部末端に位置する。そこでは、南西方向に緩く傾斜した尾根筋が谷と平行して幾本も走り、谷の支谷が尾根の中にまで入り込み凹凸に富んだ複雑な地形を形成している。

尾根の地質は河成礫層の小笠層群を主体とし、所々に内湾成泥層（白色粘土）が挟まるのが特徴となっている。

周辺の遺跡

ここでは、A-1号墳の所在する尾根筋を中心に古墳時代に絞って周辺の遺跡を概観する。

尾根筋の先端近くには横穴式石室を内部主体に持つ古墳が一基確認されている（茶畑の開墾に拠って破壊された、五ヶ山A-2号墳と仮称）。

この尾根筋が派生する付け根付近には、30m級の円墳である観音山古墳が存在している。その規模は、周辺の古墳に比べても、際だって大きい。同じ地点には更に2箇所で古墳状の高まりがあり、複数存在する可能性もある。この尾根筋の北側に所在する高位の段丘面上には、5世紀後半の豪族の居館跡と考えられる古新田遺跡があり、観音山古墳とのつながりが指摘できる。

また、A地点の南側の尾根筋では、1991年度に発掘調査を実施した五ヶ山B-1号墳（5世紀後半）があり、この尾根筋の先端近く、老人ホーム紫雲の園周辺にも古墳が存在すると思われる。

このように、五ヶ山周辺の尾根筋の末端付近には古墳時代中期以降の古墳が散在的に分

布し、一群を構成することが近年明らかとなってきた。

これらの古墳が分布する尾根の南側、現在一面の水田地帯となっている平地は、当時は潟湖となっており、この湾が尾根裾にまで入り込んで波打ち際になっていたと考えられる。

湾の周辺には古墳時代前期以降の遺跡が多く発見されている。顕著なものでは湾の西側に新堀遺跡・青木遺跡があり、1982年以降数度にわたって発掘調査が行われている。その結果、両遺跡は周辺に存在する中小遺跡群の中心的な集落であることがわかった。

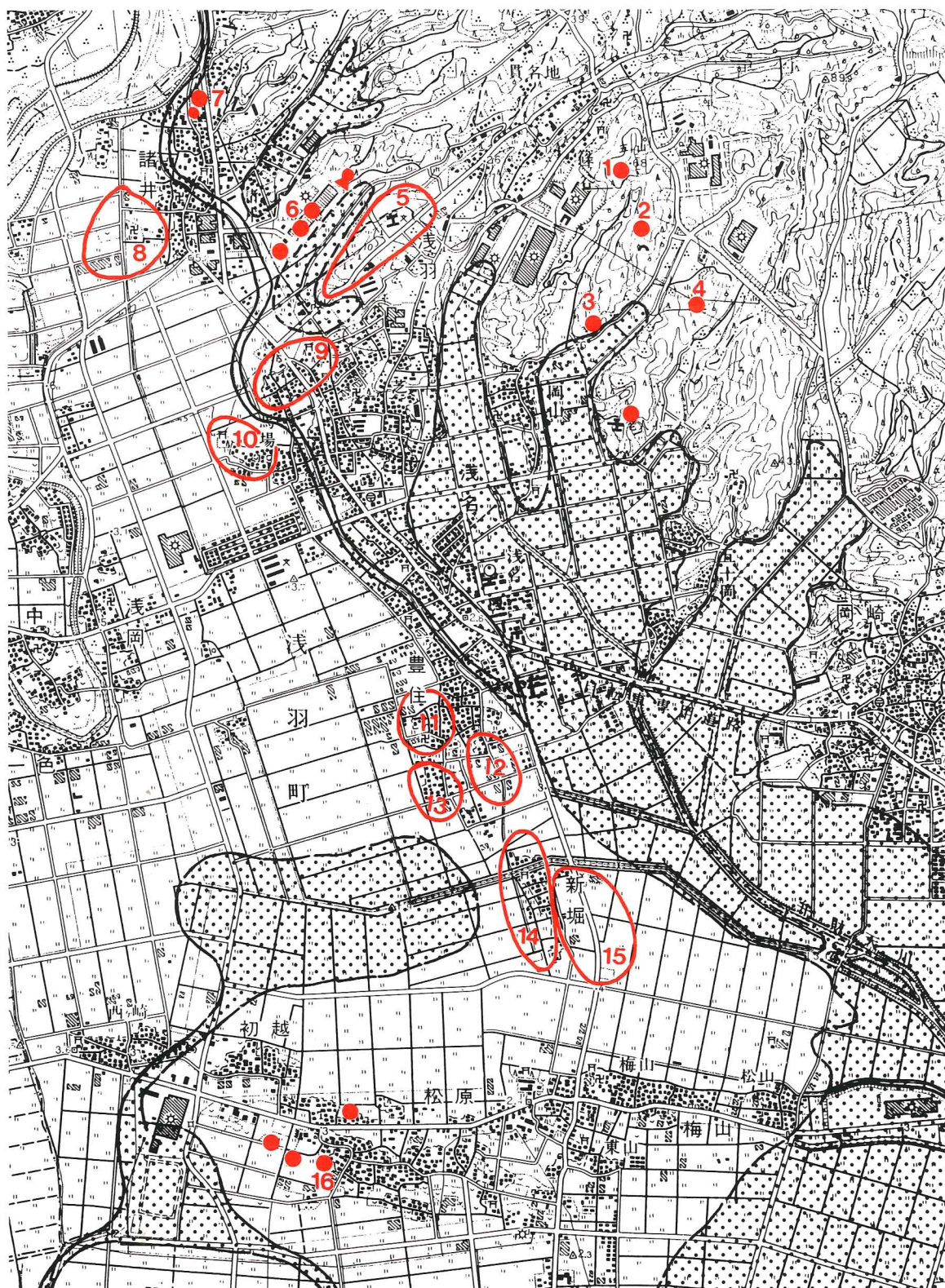
更に南の東西方向に延びる砂堤列上には、径約40mの地蔵山古墳（6世紀前半）を始めとして数基で古墳群を形成している。その立地は従来認識されてきたものと異なり、成立背景を考え合わせると浅羽地域の歴史を語る場合に欠かすことはできない。

五ヶ山A－1号墳周辺の遺跡（番号は第1図に対応）

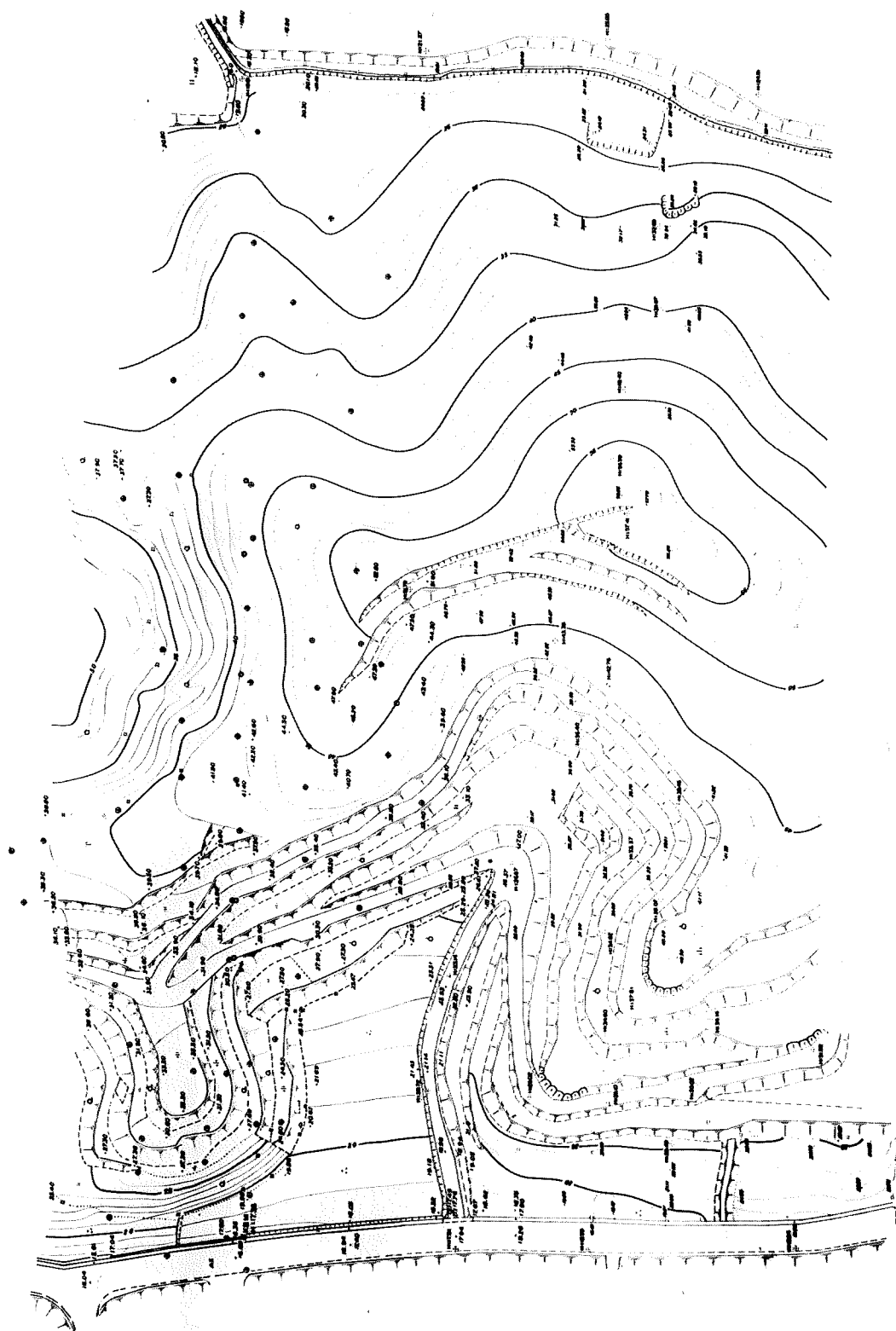
番号	遺 跡 名	時 期	遺 跡 の 概 要	文献
1	観 音 山 古 墳	古 墳 中 期 ？	径30m級の円墳の可能性あり	
2	五ヶ山A－1号墳	古 墳 中 期	当報告の古墳	1
3	五ヶ山A－2号墳	古 墳 後 期	横穴式石室 一部のみ残る	
4	五ヶ山B－1号墳	古 墳 中 期	1991～92年調査（現在未報告）	
5	古 新 田 遺 跡	古 墳 中 期	1989年調査 豪族の居館	2
6	貫名地A単位群	古 墳 後 期	1966年調査 2基調査（6～7世紀）	
7	王 子 単 位 群	古 墳 後 期	1982年調査 1基調査	3
8	十 二 所 遺 跡	弥 生 ～ 鎌 倉	1987年調査 集落	4
9	高 道 遺 跡	弥生後期～鎌倉	散布地	
10	小 林 遺 跡	弥 生 ～ 室 町	散布地	
11	常 楽 寺 遺 跡	弥 生 ～ 室 町	散布地	
12	石 原 遺 跡	弥 生 ～ 室 町	散布地	
13	居 廻 遺 跡	弥 生 ～ 室 町	散布地	
14	新 堀 遺 跡	古 墳 ～ 室 町	1990～91年調査 集落	5
15	青 木 遺 跡	古 墳 ～ 室 町	1982、1983、1990年調査 集落	6～8
16	地 蔵 山 1 号 墳	古 墳 後 期	1985年測量調査 径約40mの円墳	9

文 献

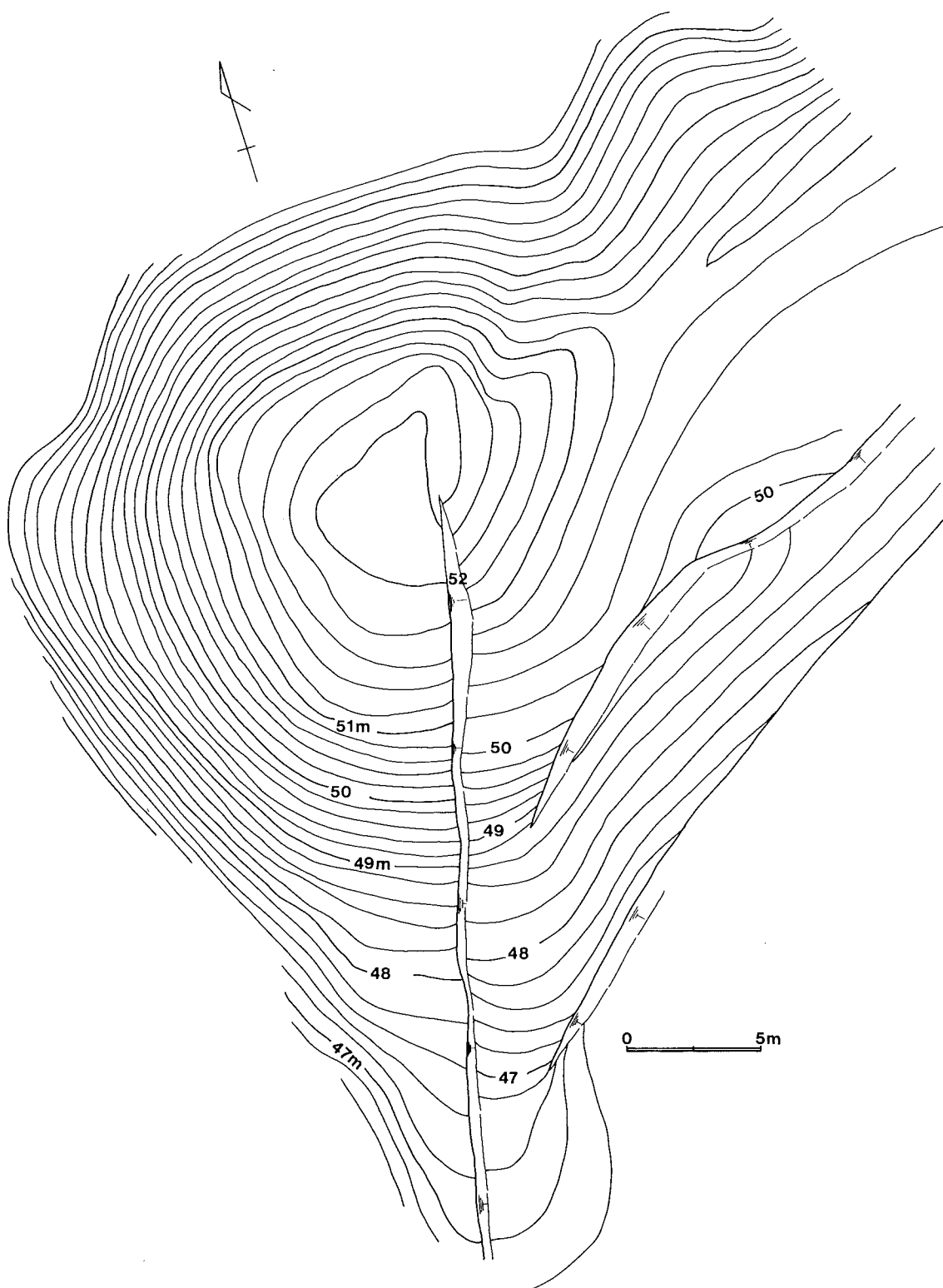
1. 本書
2. 柴田稔・柴田睦 『古新田』 浅羽町教育委員会 1991年
3. 柴田稔 『王子遺跡』 浅羽町教育委員会 1983年
4. 柴田稔 『十二所遺跡』 浅羽町教育委員会 1989年
5. 佐野五十三・竹山喜章・本杉和美 『新堀遺跡』 財団法人 静岡県埋蔵文化財調査研究所1991年
6. 柴田稔 『青木・馬場第1・西立遺跡』 浅羽町教育委員会 1982年
7. 柴田稔 『青木・馬場第1・第2遺跡』 浅羽町教育委員会 1984年
8. 山本義孝 『青木遺跡』 浅羽町教育委員会 1991年
9. 柴田稔 『地蔵山古墳群測量調査報告書』 浅羽町教育委員会 1986年



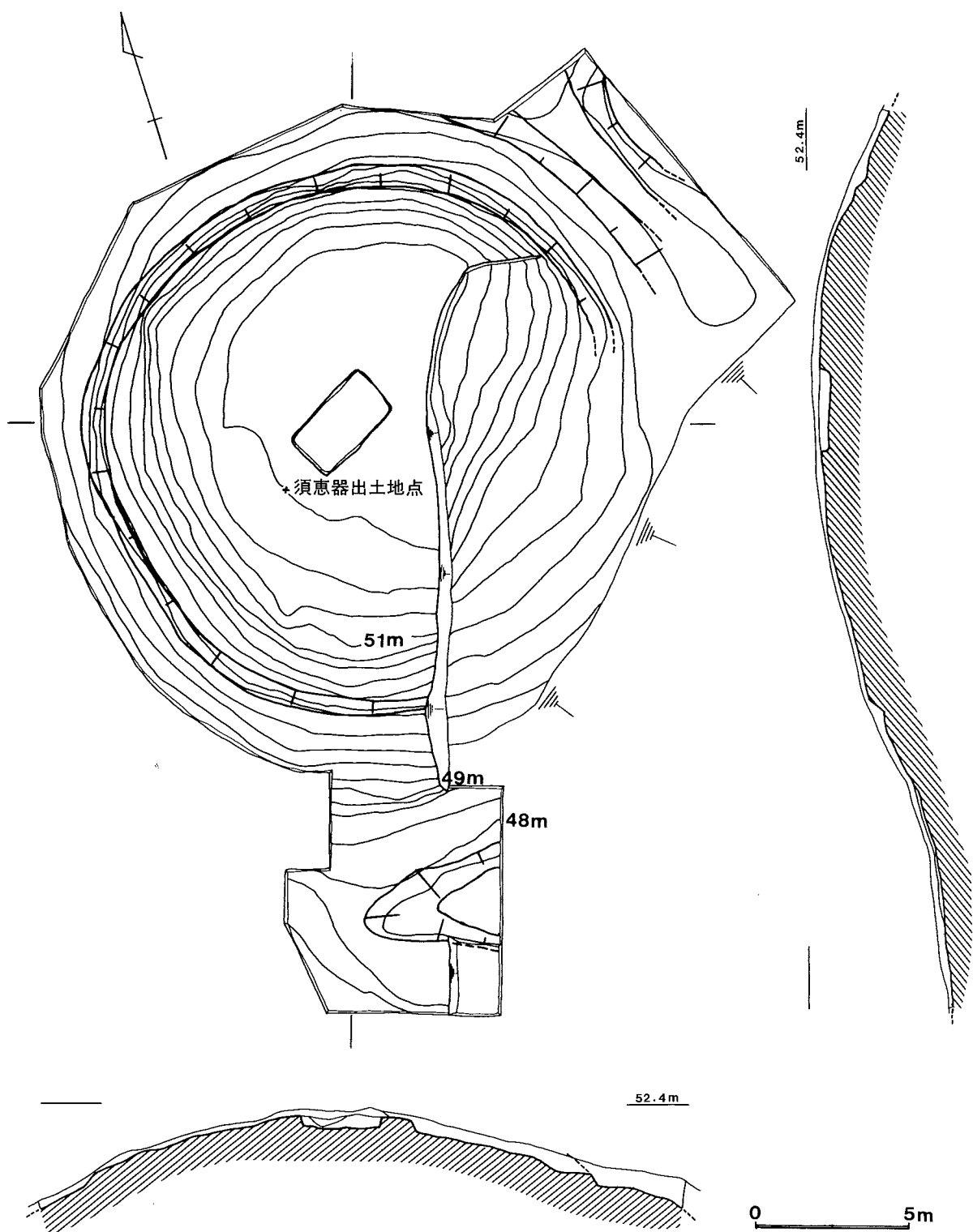
第1図 周辺遺跡分布図（25,000分の1）〔点々は潟湖等の水面の推定範囲〕



第2図 周辺地形図 (1,000分の1)



第3図 墳丘測量図（発掘前）



第4図 墳丘測量図



墳丘周辺（南より）

Ⅲ 墳 丘

立地と視界

墳丘は、小笠山丘陵を構成する尾根筋の末端近くの稜線上に位置している。この尾根筋の北側斜面は人工林として旧地形を止めているのに対し、日当たりの良い南側は蜜柑園や茶畑として利用され、裾から稜線に至るまで階段状に造成されており、旧地形がかなり変化している。

調査前の墳丘の状況は、その南側の半分近くが蜜柑園造成のために削られ、尾根筋に直交する溝も埋められていた。この時の排土を谷側に押し出して平坦部を設け、農道と蜜柑園が造成されていた。

墳頂からの視界は、南北それぞれに同様な尾根筋が谷を挟んで平行に伸びていることからこれらに遮られて狭く、尾根筋の先端方向の平野部（現在の浅羽町役場周辺）が望める程度である。これとは逆に、尾根筋の下から墳丘を望むためには谷の奥深く、墳丘近くまで入り込まないと視界には入ってこない。視界という観点からとらえた立地条件では、北の尾根筋に営まれている観音山の各古墳や、南の尾根筋に営まれているB地点の各古墳に比べると条件が悪い。

規模と造成

墳丘は稜線上の、瘤状に残った自然の高まりを巧みに利用して造成されている。古墳の形態は円墳で、規模は南北方向で径約18m、高さ約2～2.5m。東西方向で径約16.5m、高さ約2.5mある。

墳丘は、先述のように南側半分近くが蜜柑園造成に伴う造成で削られたり、攪乱を受けていたが、墳丘裾は旧地形を止めている部分が予想以上に多く、南端でも本来の規模を伺うことができた。調査では、表土を取り除くと直ぐに礫混じりの茶褐色粘質土の地山が出

てきた。したがって、盛土が完全に流失したというよりも、造成当初から殆ど用いなかったのではないかと考えている。つまり、当墳は自然の高まりをそのまま利用し、地山を削り出すことによって墳丘を造成した古墳といえる。完掘した墳丘を観察すると、地山がきれいな円形をしており、図面の等高線も一部に、木の根の攪乱によって乱れている部分があるが、円を描くことから見ても、このことを意識して地山を削り、墳丘を整形したものと考えられる。

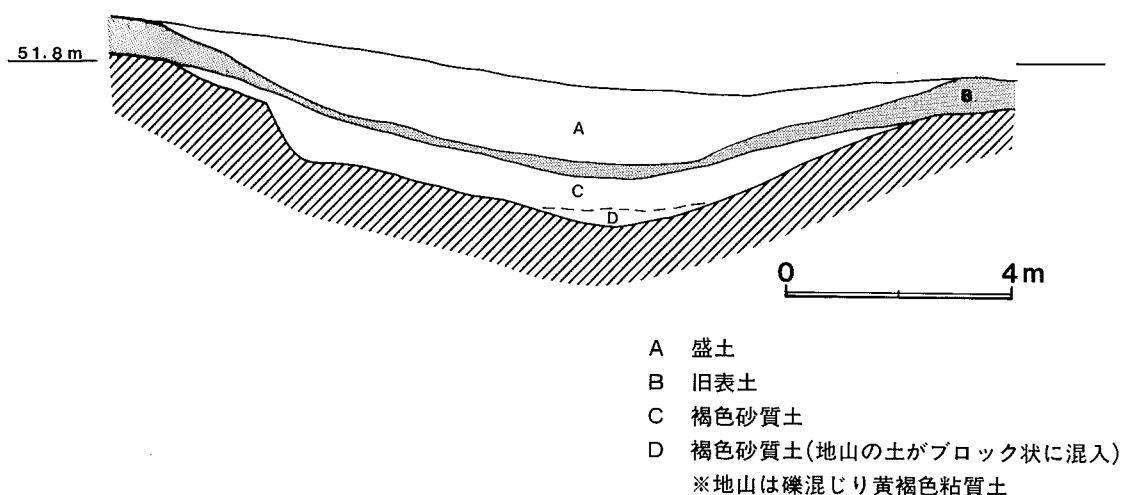
墳裾では、攪乱を受けている部分を除くと全面に0.4～0.5mの幅で急斜面に地山を削り込んでいる面（カット面）が確認できた。この面の下には0.5m程の平坦部も伴い、これによって墳裾が明確に識別できる。

外部施設

外部施設として、周溝が二箇所で見つかった。これらは、尾根筋に直交する方向で掘られており、墳丘を挟んで南側と北側に位置している。自然地形と墳丘を明確に区画するため、稜線上に掘られたものであろう。

北側の周溝は、東側が攪乱のために残っていなかった。確認できたのは尾根筋の中央部から西にかけての部分である。その規模は、墳丘に沿って弧を描くので一定していないが、最も狭い尾根の稜線部分では幅約5.5m、深さ約1.2mある。

南側の周溝は、溝の上部が攪乱のために残っていなかったが、特に深くなる東寄りの部分で底部が残っていた。その規模は幅約3.5m、深さ約0.3mある。平面図に入れた部分の東側は攪乱によって残っていない。



第5図 北側周溝断面図



墳丘全景（東より）



墳丘全景（南より）



墳丘裾



北側周溝断面（南より）

Ⅳ 主 体 部

主体部は試掘の段階に十字に設定したトレンチの交点付近で、地山中に掘り込まれた土壙状の遺構（暗褐色の砂質土が詰まる）を発見し、これを墓壙と認識していたが、本調査に入ってからはその平面形態を最後までつかむことができなかった。

畔を外しながら、平面的に全体を掘り下げ続けた結果、地表から約0.5mの深さで鉄刀一振が出土した。その後この刀を一つの目安としてようやく、墓壙の輪郭を識別することができた。

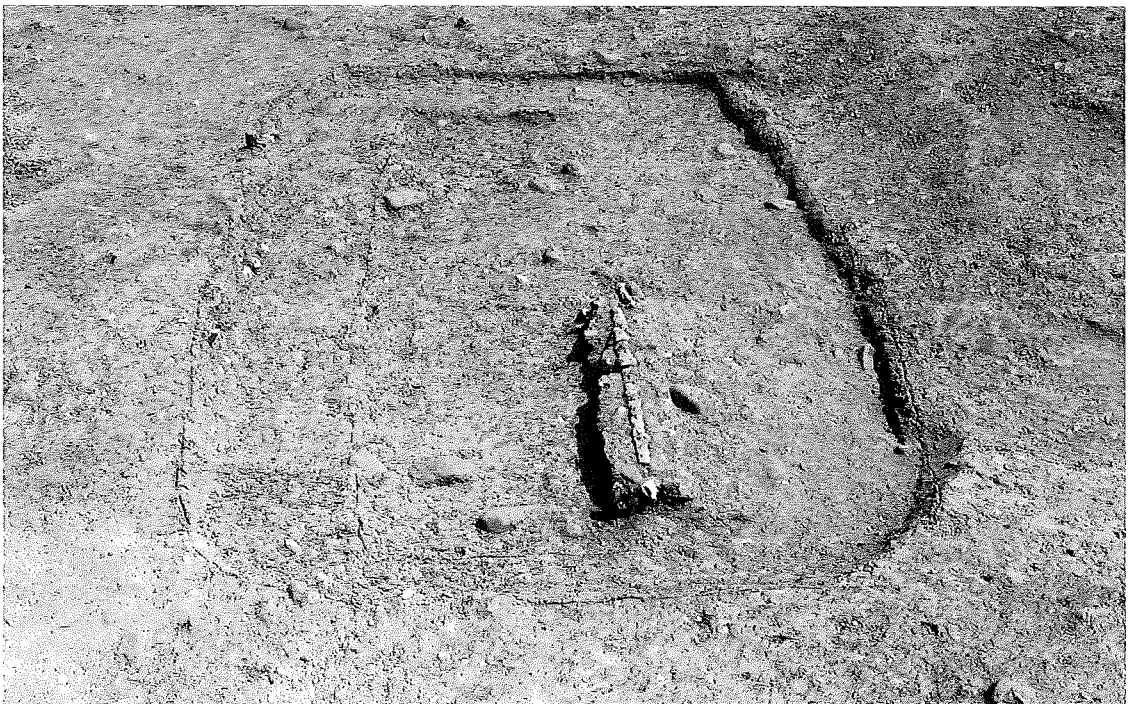
この結果、この主体部は東側を頭位とするものとわかった。

墓壙の規模は、長さ約3.1m、幅約1.9m、深さは確認した部分で約0.2mある。平面形態は隅丸の長方形で、北側の長辺では地山とははっきり区別できたのに対し、南側では識別が難しかった。

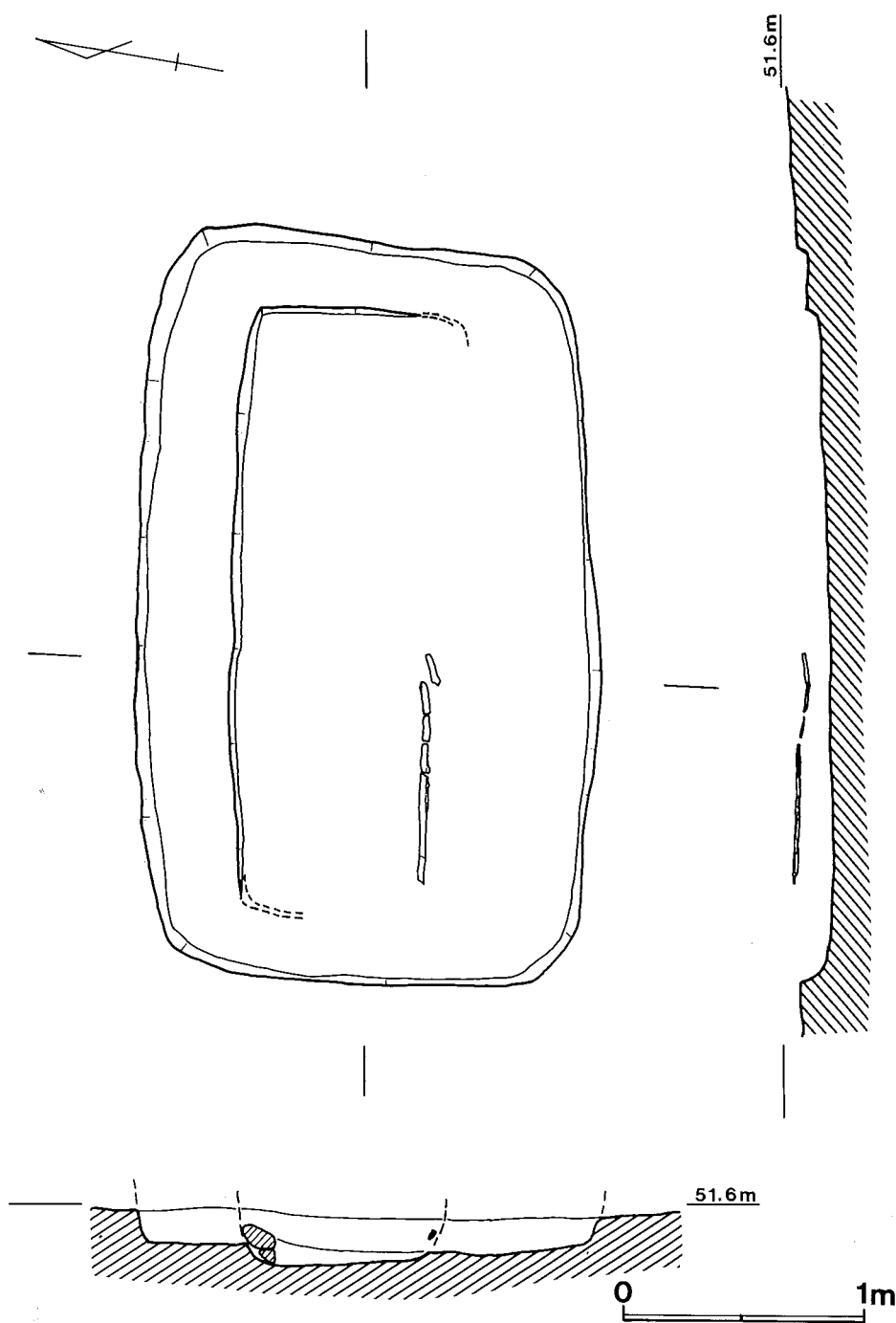
木棺の痕跡は、墓壙の中に一段掘り窪められた部分があり、これが木棺に相当する。この部分には、地山に包含されている白色粘土が混じらない淡褐色の粘質土が詰まっている。

北側ではその輪郭がはっきり区別できたが、南側では区別できなかった。その規模は長さ約2.4m、幅は出土した鉄刀の位置から推測して、0.8～0.9m程であったと考えられる。

木棺の形態は、土層断面を見ると底部が僅かに弧を描くことと、唯一の出土遺物である鉄刀の出土状態が本来の位置を動き、棺内に滑り落ちるようにして出土していることから



主体部（南より）



第 6 図 主体部実測図

考えて、割竹形木棺と推定される。

鉄刀は被葬者側に刃部を向け、木棺の西端、小口部付近に副葬されていた。

この他の遺物は、須恵器の甕の破片が2片（同一個体）墓壙外の西側で出土した。

V 出土遺物

鉄 刀

刀身の全長91.3cm、鎬をもたない平造りの大刀で、鋒は保存状態が悪く完全な形で掘り出すことができず欠けてしまった。残っている部分からその形態は、僅かに弧を描くものと推測される。背は平背で幅0.6～0.7cmある。関は刃の側にだけあり、斜角でゆるい弧を描いている。目釘穴は錆のために位置は不明。茎は長さ18cm、茎尻付近は錆の付着が著しく不明瞭だが、背の部分が緩く曲り、茎尻は斜めとなる。

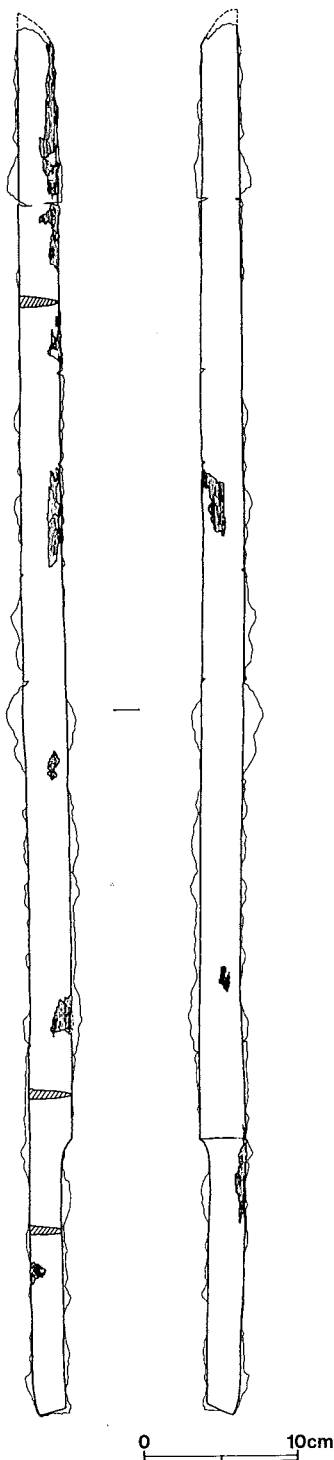
木質は、鋒付近の刃側で残っている部分が多く、茎でも背側に見られる。関には鏝が伴っていた痕跡がなく、木質がこの部分ではっきりと別れることから、白木の鞘に入れられ副葬されたと思われる。出土状態は、先述のように全体が棺内に滑り落ちるような状態で出土している。鉄刀は全体で11の部分に割れ、特に関付近は著しい。レベル的にも他の部分より低く、鋒に比べると約7cm低い。

須 恵 器

出土した須恵器は同一個体の大甕の破片が2片ある。これらは、墓壙の西端から西へ約1.2mの地点で表土の下から出土した。出土状態から墳丘上の祭祀で使用されたものと考えられる。

1は縦5.5cm、幅8.8cm、2は縦5cm、幅7.6cm色調は淡灰色、断面は中心部を除いて小豆色。

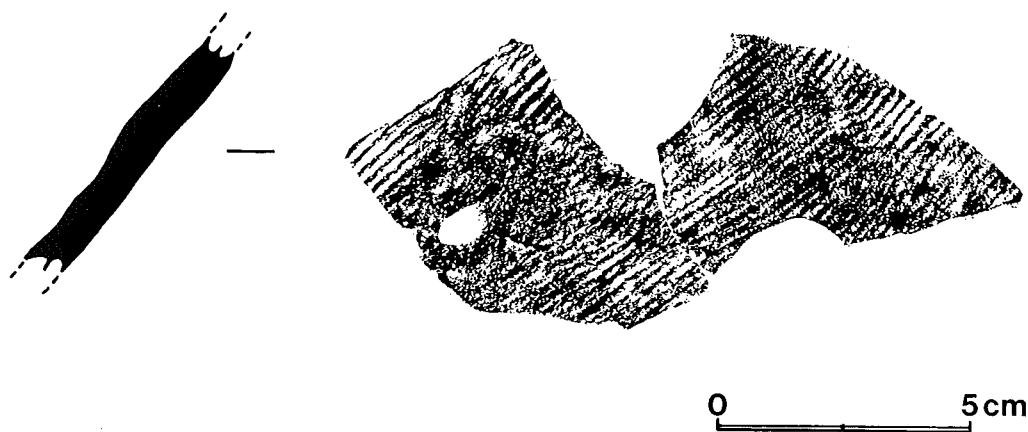
調整は1・2共に表面は交差する平行叩き目文を施し、内面は丁寧にスリ消している。甕の底部付近の破片であろう。年代はTK208を中心とした前後に該当すると考えられる。



第7図 鉄刀実測図



鉄刀出土状態



第 8 図 須恵器実測図

Ⅵ 総 括

五ヶ山A-1号墳は、従来古墳の存在が不明瞭であった五ヶ山周辺の尾根地帯で確認できた最初の例となった。この古墳の発見によって当尾根筋はもちろん、周辺部についても更に複数の古墳の存在が知られるようになった。

例えば、同じ尾根筋の先端近くには横穴式石室を主体部に持つA-2号墳が在り、眺望の良い高レベルの部分から尾根の先端に向かって順次古墳を造っていった可能性が考えられる。

南側の尾根筋の高まりでもB-1号墳が発見され、岡山集落の北側の尾根筋にも数箇所古墳を思わせる不自然な高まりを見ることができる。こうしたことから、今後同様な立地の古墳が周辺部で更に発見される可能性は高い。

これら尾根筋上に分布する古墳の特徴は、密集せず散在的に存在していることである。例えば、A-1号墳周辺に設けたトレンチでも古墳以外の遺構は存在せず、開墾された部分の露出する断面にも全くそれらしきものは見当たらなかった。各古墳がある程度の距離をもって離れ、単独に存在するように立地を考えた結果かも知れない。

古墳の年代は、出土した遺物が鉄刀1振と須恵器2片に限られることから、年代を限定しにくい鉄刀より須恵器片を中心に考えざるを得ない。このことから5世紀後半の中で、しかも後半ぐらいが妥当なところではないかと考えられる。

墳丘の構造上の特徴は、盛土を殆ど用いず地山を削り出して整形することである。これは、小笠山丘陵を構成する小笠層群の地質的な特徴からか、自然の瘤状の高まりや平坦部が尾根の稜線上に複数形作られており、それを利用したものである。もし、明確な外部施設としての周溝を掘ったり、墳裾を削る等の人為的な行為が無かったら古墳であるか否かの判断は、試掘時に墓壙を確認するしかない。今後、同様な構造の古墳の発見は増加するであろうが、その判断はトレンチの設定場所の良否と、場所によって複雑に変化する地山の識別に大きく左右されるという危険性を含んでいる。

立地から考えると、これら尾根筋に造られた古墳が成立する基盤となった集落群には浅羽平地南部、旧原野谷川の自然堤防上に位置する遺跡群を第一に考えたい。ただし、現時点では5世紀後半の遺物を確実に出す集落は知られておらず今後の課題といえる。

副葬された遺物は少ないが、この時代の中小規模の古墳は副葬品が乏しいのが特徴であり問題は無いといえる（周辺の調査事例として袋井市若作古墳群が同じ傾向にある）。1号墳は観音山古墳を中心とした古墳群を構成する一基であり、しかも単独で築かれ、規模も20m近いことから首長層クラスの奥津城であることには違いないであろう。

文末ではありますが、現地調査や報告書作成にあたって多くのご教示を頂いた柴田稔氏、調査中何かとお世話になった樽松組・豊翔の皆さん、五島康司氏、松井一明氏に対しこの場を借りてお礼申し上げます。

参考文献

- 大庭正八 「袋井市域の自然環境」『袋井市史』－通史編－ 袋井市役所 1984年
加藤芳朗 「大畑遺跡周辺の地学的背景と遺跡立地」『袋井市大畑遺跡』袋井市教育委員会1981年
吉岡伸夫・松井一明 『若作遺跡 若作古墳群』袋井市教育委員会 1990年
田辺昭三 『陶邑古窯址群Ⅰ』 平安学園考古学クラブ 1966年
大塚初重・小林三郎編 『古墳辞典』東京堂出版 1983年



墳丘周辺（北より）

五ヶ山A-1号墳

平成4年3月31日

発行 静岡県磐田郡浅羽町教育委員会

〒437-11 磐田郡浅羽町浅名1028

印刷 松本印刷株式会社

〒421-03 榛原郡吉田町片岡2210